背 景

なぜ、「やまなし KAITEKI 住宅 SHOEI Ver.1」は生まれたの？

国際情勢の変化や、円安などの経済的な情勢も相まって、海外産の木材や資材の高騰が、住まいづくりに対して追い打ちをかけ、私達の「住まい」をとりまく環境は、めまぐるしく変化しています。

また、核家族化や単身世帯が増加し、住まい方も、新築だけではなく、中古物件を購入してリノベーションをする人も増えてきました。

私たちは、「人や人の手の温かみや創造性を大切にし、時代や国境を超えて永く愛される空間や、ライフスタイルが提案できる会社」を目指している中で、今後どのように住まいを考えていくべきか悩んできました。

「住まい」は、その地域の環境や気候、風土などの影響を受けて形づくられます。豪雪地帯には、積雪対策として、深い軒や急な屋根勾配の住まいがあり、台風の多い地域では、木造住宅だけでなく鉄筋コンクリートで造られた住まいがあるように、都市部では、周囲の目線を遮るようなプライバシーに配慮した住まいがあり、郊外では、都市部とは異なる住まいがあるように、先人たちは、その地域の環境や特性、気候を踏まえて住まいを造ってきました。

「住まい」は、その土地の気候や風土、暮らしに寄り添うかたちで、長い年月をかけて育まれてきました。

例えば、岐阜の白川郷では、雪深い冬に備えて「合掌造り」と呼ばれる、手を合わせたような急勾配の屋根が特徴の家が建てられてきました。これは、屋根に積もった雪が自然と滑り落ちるように工夫されたもので、雪国ならではの知恵の結晶です。

一方、直射日光がつよく、台風が多くて湿気も強い沖縄では、赤瓦の屋根と石垣、そして屋敷林に囲まれた住宅が発達しました。強い風をやわらげ、暑さや塩害から住まいを守るための工夫が、自然と共に生きるための先人の知恵でした。

都市部では、隣家との距離が近いため、視線をやわらかく遮る窓の配置や、中庭を囲むようなプライバシー重視の設計が多く見られます。一方、郊外や自然に囲まれた地域では、風が通り、光がやさしく入る開放的で伸び伸びとした住まいが好まれています。

このように、住まいは、自然と調和しながら、そこに暮らす人々の暮らしを守り、育むために形づくられてきたものであり、先人たちの知恵と工夫が詰まった、地域ごとの“暮らしのかたち”と言えます。

それでは、私達の暮らすこの地域「やまなし」は、どのような場所なのでしょうか？

【寒暖差の激しい“やまなし”】

山梨県は、日本の内陸部に位置し、海洋の影響を受けにくい、内陸性気候に分類されます。気温の変化が大きく、乾燥しており、降水量が少ないのが特徴です。特に、日較差（昼と夜の気温差）や年較差（夏と冬の気温差）が大きい傾向があります。

【夏暑く・冬寒い“やまなし”】

甲府盆地周辺では、夏は最高気温が 40℃に達する日もあり、冬は氷点下になることも多く、「夏は暑く、冬は寒い」という特徴が顕著です。また、盆地特有の地形によって、空気がこもりやすく、夏は湿気が滞留して体感的な暑さが増し、冬は冷気が抜けにくいために底冷えするような寒さを感じることがあります。

【山々に囲まれた“やまなし”】

山梨県は、周囲を山々に囲まれた盆地地形であることが、気候に大きく影響しています。南アルプス、八ヶ岳、秩父山系、富士山に囲まれ、夏では、フェーン現象が発生すると、空気は昇温し、甲府盆地を高温にします。また、冬の季節風は、北風となり、八ヶ岳方面から、八ヶ岳おろしとなって盆地に吹き荒れます。一方で、その地理的条件から、日照時間は全国トップクラスとなっており、降水量は、全国的にみて少なめとなっています。

【同じ県でも、複数の気候をもつ“やまなし”】

山梨県は標高差が大きいため、富士五湖周辺や八ヶ岳、南アルプスなどの高地では、甲府盆地周辺と比べて年間を通じ、冷涼な気候になります。移住エリアとして、人気の八ヶ岳周辺の気候は、標高が高く、高冷地特有の冷涼な気候となっており、夏は避暑地として人気で、湿度が低く過ごしやすい地域ですが、冬は厳しい寒さとなります。富士五湖周辺の気候も、年間を通じて冷涼な気候ですが、冬は冷え込みが強く、積雪が多く、氷点下 10℃以下になることもあります。富士山の存在により、南からの暖かい空気を遮るため、北麓地域を高冷な気候としており、甲府盆地の気候とは異なります。

このような、私たちを取り巻く社会状況の変化や、「やまなし」の風土の中で、どのような住まいを提供するべきか。そんな疑問から、「やまなし KAITEKI 住宅　SHOEI　Ver.1」は生まれました。